

(23-1) Attadantavattu ブッダがご自身について語られた物語 320-322 ←参照(2-1) ウデーナ王物語 21-23 i サーマーヴァティーとブッダに対するマーガンディヤーの企み

ahaṃ nāgo vāti imaṃ dhammadesanaṃ satthā kosambiyā viharanto attānaṃ ārabha katesi. vatthu appamādavaggassa ādigāthāvaṇṇanāya vitthāritameva. vuttañhetam tattha (dha. pa. attha. lśāmāvativattu) –

この法話は、師がコーサンビーに滞在しておられたときに、ご自身について語られたものである。物語は「不放逸の章」の最初の詩句の註釈中に詳しく出ている。そこではこのように語られている。

マーガンディヤーは彼女たち（ウデーナ王のサーマーヴァティー王妃と侍女たち）に何もできなかったもので、「修行者ゴータマに仕返しをしてやろう」と都の人々に賄賂を渡して、「修行者ゴータマが都の中へ入って歩いていたら、奴隷や雇人たちと一緒に罵詈雑言を浴びせて追い払っておくれ」と頼んだ。間違った見方をする者たちは三宝に喜びを見出さないで、都の中に入ってきた師を追いかけて、「おまえは泥棒だ」「おまえは愚か者だ」など十種類の悪口で嘲った。

これを聞いて、アーナンダ尊者は師に言った。「尊師よ、この都の人々は私たちを罵り嘲っています。ここから他のところへ行きましょう。」「アーナンダよ、どこへ行くのですか。」「尊師よ、他の都へ行きましょう。」「アーナンダム、そこで人々が罵ったら、またどこへ行けば良いのですか。」「尊師よ、そうしたら、また別の都に行きましょう。」「そこで人々が罵ったら、どこへ行けば良いでしょうか。」「尊師よ、そうしたら、また別の都に行きましょう。」「

「アーナンダよ、そのようにするのは適切ではありません。どこかで問題が起こったら、そこで問題がおさまってから他のところへ行くべきです。しかし、アーナンダよ、誰が罵っているのですか。」「尊師よ、奴隷や雇人を始めとして、みな罵っています。」「アーナンダよ、私は戦場に駆り出された象のようなものです。戦場に投げられた象たちは、四方から飛んでくる矢に耐えるという責務があります。同じように、大勢の本性卑しい人々によって語られる言葉に耐えることは、私の責務です」とご自身について法を説き明かされて、これらの詩句を唱えられた。「320 戦場で弓から放たれた矢を耐え忍ぶ象の如く、私は、誹謗を耐え忍ぼう。多くの人は性が卑しいゆえ。」「321 人々は調教された象を集会に連れて行き、王は調教された象に乗る。誹謗を耐え忍び、自らを制御する者は、人間の中の最上の者である。」「322 調教された驃馬は勝れている、血統が良いシンドウ産の馬は勝れている、クンジャラと呼ばれる大象たちも勝れている、自己を制御した人はそれらよりも勝れている。」と。

法話が終わったとき、賄賂を受け取って大通りの辻などに立って罵っていたすべての群衆が、預流果を獲得した。

320. Ahaṃ nāgo va saṅgāme, cāpato patitaṃ saraṃ; Ativākyam titikkhissam, dussīlo hi bahujjano.

320.戦場において、弓から放たれた矢を〔忍受する〕象のように、わたしは、〔他者からの〕誹謗の言葉を忍受するであろう。まさに、劣戒なるかなー〔世の〕多くの人々は。

320.Ahaṃ nāgo va saṅgāme Cāpato patitaṃ saraṃ Ativākyam titikkhissam Dussīlo hi bahujjano

321.Dantaṃ nayanti samitiṃ Dantaṃ rājābhirūhati Danto settho manussesu Yotivākyam titikkhati

322.Varamassatarā dantā Ajāniyā ca sindhavā Kuñjarā ca mahānāgā Attadanto tato varam

320.戦場で 弓の箭をよく忍ぶ 象の如くに我も亦 世の誹謗そしりをば耐えんかな 性さが悪しき人多かれば

321.調御の象は集会しゅうえに参じ 王は調御の象に乗る 己れ調御し誹謗そしりをば 耐ゆるは人中超越者 死して善趣に到らん

322.馴けられたる驃馬も良く 気高きシンドウ駿馬しゅんめ良く クンジャラーの巨象良く 調御の自己は更に良し

訳：江原通子 No.193 (2011 年 3 月) 最前線に立つ戦象 逆境に対応するブッダの方法 Success is the production of adversaries.

アハン	ナーゴーフ	サンガーマー	チャーパトー	パティタン	サラン
Ahaṃ	nāgo va	saṅgāme,	cāpato	patitaṃ	saraṃ;

わたしは、〔忍受する〕象のように、戦場において、弓から放たれた 矢を

Ahaṃ/ahaṃ(人代 sg.nom)私 nāgo va=nāgo/nāga(m.sg.nom)[/]竜,象,ナーガ樹,いぬしで+iva/iva(indecl)[/ BSk.viya]如く=viya, va saṅgāme/saṅgāma(m.sg.loc)戦,戦闘,戦場,戦陣, cāpato/cāpa(m.n.sg.abl)[/]弓 patitaṃ/patita(a.m.sg.acc)[patati < pat の pp]落ちたる saraṃ/sara : ①(m.sg.acc)[Sk.sara]葦(あし),矢②(a)[< saratisr]流れる,動く③(m.n)[/]池,沼,湖④(a)[< smr]憶念の,念の⑤(m)[Sk.svara < svar]声,母音⑥ sarati : ②(憶念す)の imper.

アティワーキャン	ティティツキツサン	ドゥッスィーロー	ヒ	バフツジャノー
Ativākyam	titikkhissam,	dussīlo	hi	bahujjano.

〔他者からの〕誹謗の言葉を 忍受するであろう。劣戒なるかな まさに、〔世の〕多くの人々は。

Ativākyam/ativākya(n.sg.acc)誹謗,叱責 titikkhissam/titikkhati(v.反照態 fut.1sg)[Sk.titiksate.tij の desid.cf.tikhina]堪える,忍耐す, dussīlo/dussīla(n→m.sg.nom)[du-sīla]悪戒,破戒,劣戒 hi/hi(adv.conj)実に;何となれば bahujjano=bahu/bahu(a持)[/]多くの,多の-jana,-jañña 多衆+j/+jano/jana(m.sg.nom)[/]人,人々.

321. Dantaṃ nayanti samitiṃ, dantaṃ rājābhirūhati; Danto settho manussesu, yotivākyam titikkhati.

321.調御された〔象〕を、〔人々は〕戦場へと導く。調御された〔象〕に、王は乗る。〔自己が〕調御された者は、人間たちのなかの最勝の者ー彼は、〔他者からの〕誹謗の言葉を忍受する。

ダントアン	ナヤンティ	サミティン	ダントアン	ラージャービルーハティ
Dantaṃ	nayanti	samitiṃ,	dantaṃ	rājābhirūhati;

調御された〔象〕を、〔人々は〕導く。戦場へと 調御された〔象〕に、王は乗る。

Dantaṃ/danta : ①(m)[/]歯,歯牙,象牙②(a.m.sg.acc)[Sk.dānta.dammati.pp.]調御されたる,訓練されたる nayanti/neti;,nayati(v.pr.3pl)[Sk.nayati nī]導く,指導す,結論に達す samitiṃ/samiti(f.sg.acc)[< sam-i]集合,集会, dantaṃ/ danta : ①(m)[/]歯,歯牙,象牙②(a.m.sg.acc)[Sk.dānta.dammati.pp.]調御されたる,訓練されたる rājābhirūhati=rāja/rājan:rāja(m)王,国王 +abhirūhati/abhirūhati(v.pr.3sg)[abhi-ruh]上る,登る

ダントー セッター マヌッセース ヨーティワーキャン ティティツカティ
Danto settho manussesu, yotivākyam titikkhati.
[自己が]調御された者は、 最勝の者ー 人間たちのなかの 彼は、[他者からの]誹謗の言葉を 忍受する。
Danto/ danta : ①(m)[/]歯,歯牙,象牙②(a.m.sg.nom)[Sk.dānta.dammati:pp.]調御されたる,訓練されたる settho/settha(a.sg.nom)
[Sk.sreṣṭha]最上の,最勝の,殊勝の manussesu/manussa(m.pl.loc)[Sk.manuṣya]人,人間, yotivākyam=yo/ya(関代 m.sg.nom)[Sk.yah]
〜である人,〜であるもの+ativākyam/ativākyā(n.sg.acc)誹謗,叱責 titikkhati/titikkhati(v.pr.3sg)[Sk.titikkṣate.tij の desid.cf.tikkhīṇa]堪
える,忍耐す。

322. Varamassatarā dantā, ājānīyā ca [ājānīyāva (syā.)] sindhavā; Kuñjarā ca [kuñjarāva (syā.)] mahānāgā, attadanto tato varam.
322. 優れているのは、調御された騾馬たちであり、しかし、善き生まれのシンダウアたち（シンドウ産の良馬）であり、
さらには、クンジャラの大きいなる象たちである。それよりも優れているのは、自己が調御された者である。

ワラマッサタラー ダンター アージャーニーヤー チャ スィンダワー
Varamassatarā dantā, ājānīyā ca sindhavā;
優れているのは 騾馬たちであり 調御された 善き生まれの しかして、 シンダウアたちであり、
Varamassatarā=Varam/vara(a.m.n.sg.nom)[/]すぐれた,高貴の,最上の;恵与;福利,願望+assatarā/assatara(m.pl.nom),assatarī(f)
[Sk.asvataṛa]驢馬 dantā/danta : ①(m)[/]歯,歯牙,象牙②(a.m.pl.nom)[Sk.dānta.dammati:pp.]調御されたる,訓練されたる,
ājānīyā/ājāñña : ājānīya : ājāniya(a.m.pl.nom)[BSk.ājāneya]よき生れの,善種の,高貴の,駿馬,良馬 ca/ca(conj)〜と,また,しかし,〜
も,そして sindhavā/Sindhava(a.m.pl.nom)[Sk.Saindhava<Sindhu]辛頭産の,辛頭産の馬,駿馬,辛頭産の塩,岩塩,辛頭国,辛頭国人

クンジャラー チャ マハーナーガー アッタダントー タトー ワラン
Kuñjarā ca mahānāgā, attadanto tato varam.
クンジャラの さらには、 大きいなる象たちである。 自己が調御された者である。それよりも 優れているのは、
Kuñjarā/kuñjara(m.pl.nom)[/]象 ca/ca(conj)〜と,また,しかし,〜も,そして mahānāgā=mahā/mahant(a持)大なる,偉大の
+nāgā/nāga(m.pl.nom)[/]竜,象,ナーガ樹,いぬして, attadanto=atta/atta : ①(a)得た,取れる②=attan(m 依対)我,自己,我体+danto/
danta : ①(m)[/]歯,歯牙,象牙②(a.m.sg.nom)[Sk.dānta.dammati:pp.]調御されたる,訓練されたる tato/tato[ta の abl]そこから;それ
より,それ故に,その後←ta(人指示代)彼,その,彼女 varam/vara(a.m.n.sg.nom)[/]すぐれた,高貴の,最上の;恵与;福利,願望。

(23-2) Hatthācariyapubbakabhikkhuvatthu 前生が象使いだった比丘の物語 323

na hi etehi imam dhammadesanaṃ satthā jetavane viharanto ekaṃ hatthācariyapubbakaṃ bhikkhuṃ ārabha kathesi.
この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、前生が象使いだった比丘について語られたものである。

その比丘は、ある日、アチラヴァティー河の岸で、象の調教師が一頭の象を調教しようとしたが、自分の望んだ芸を教える
ことができずにいるのを見て、近くに立っていた比丘たちに話しかけた。「ご同朋よ、もしあの象使いがああ象のしかじか
の場所を突けば、速くその芸を教えこむことができるのですがね。」象使いは彼の話聞いてその通りにしたところ、その
象をよく調教することができた。

比丘たちはこのできごとを師に話した。師は調教の仕方を話した比丘を呼んでこさせて、「あなたがこのようなことを話した
というのはまことですか」とお訊ねになり、その比丘が、「まことでございます、尊師よ」と答えると、師は叱責されて
「愚か者よ、象を乗り物にするにせよ他の調教されたものにせよ、あなたに何の関係があるのですか。よく調教された乗り
物にのって、未だの地に行くことはできません。しかし、自己をよく調御した者は、未だの地(寛り)に行くことができるの
です。ですから、自己を調御しなさい。他のものの調教はあなたには何の関係もありません」とおっしゃって、次の詩句を
唱えられた。「323 そのような乗り物で、未だ行ったことのない方角に行くことはできない、自己をよく調御した者が行くこ
ころだから、[そこへは] 自制した者が自制によって行く。」と。

法話が終わったとき、多くの人びとが預流果などを獲得した。

323. Na hi etehi yānehi, gaccheyya agataṃ disaṃ; Yathāttanā sudantena, danto dantena gacchati.

323. まさに、これらの乗り物では、[いまだ] 赴かざる方角（涅槃）に赴くことはできない――すなわち、善く調御された
自己[という乗り物]で、調御された者が調御によって赴くようには。

Na hi etehi yānehi, Gaccheyya agataṃ disaṃ; Yathāttanā sudantena, Danto dantena gacchati.

これら各種の乗り物も 涅槃に至ることを得ず よく調御せし己のみ 調御によりて行くを得る 訳：江原通子
No.194 (2011 年 4 月) 高級な乗り物の選び方 自己制御は最高級な乗り物 Select the most excellent vehicle for your life.

ナ ヒ エーテーヒ ヤーネーヒ ガツチェッヤ アガタン ディサン
Na hi etehi yānehi, gaccheyya agataṃ disaṃ;
できない まさに、 これらの 乗り物では、 赴くことは [いまだ] 赴かざる 方角（涅槃）に
Na/ hi/ etehi/eta,etad(pron.a.m.pl.inst)これ yānehi/yāna(n.pl.loc)[/ <yā]乗,乗物, gaccheyya/gacchati(v.opt.3sg)[/ <gam]行く
agataṃ/agata(a.f.sg.acc)[a-gata]未だの disaṃ/disā(f.sg.acc)[Sk.diś,diśā]方角,方位,四方

ヤター タナー スダンテーナ ダントー ダンテーナ ガツチャティ
Yathā' ttanā sudantena, danto dantena gacchati.
すなわち、 自己[という乗り物]で、 善く調御された 調御された者が 調御によって 赴くようには。
Yathāttanā=Yathā/yathā(adv)[ya-thā]...の如くに,...の如し+attanā/attan(m.sg.abl)[Sk.ātman]我,自己,我体
sudantena/sudanta(a.m.sg.inst)[su-danta]善く調御(訓練)せられた, danto/ danta : ①(m)[/]歯,歯牙,象牙②(a.m.sg.nom)
[Sk.dānta.dammati:pp.]調御されたる,訓練されたる dantena/ danta : ①(m)[/]歯,歯牙,象牙②(a.m.sg.inst)[Sk.dānta.dammati:pp.]
調御されたる,訓練されたる danta : ①(m)[/]歯,歯牙,象牙②(a.m.sg.nom)[Sk.dānta.dammati:pp.]調御されたる,訓練されたる
gacchati/gacchati(v.pr.3sg)[/ <gam]行く。

(23-3) Parijñābrāhmaṇaputtavattu 老いた婆羅門と息子たちの物語 324

dhanapālōti imāṃ dhammadesanāṃ saṭṭhā sāvatthiyaṃ viharanto aññatarassa parijñābrāhmaṇassa putte ārabha kathesi.

この法話は、師がサーヴァッティー市に滞在しておられたときに、ある婆羅門の息子たちについて語られたものである。

サーヴァッティー市に住むある婆羅門に八万金の財産があり、成人した四人の息子たちを結婚させ、四万金を彼らに与えた、ということである。さて、婆羅門の妻が亡くなったとき、息子たちは相談した。「もし父さんが新しい婆羅門夫人を娶り、彼女の腹に子供が宿ったら、必然的に家は分かれることになる。そうだ、それなら我々が父さんの面倒を見よう。」息子たちは「私たちがあなたをこのように、命のある限り、お世話します。ですから、残りの財産も私たちにください」と頼んだ。父の婆羅門はふたたび、息子一人一人に一万金ずつ与え、自分が身につけている衣類を除いて、すべての動産、不動産を四人に分け与えた。

息子の嫁が家の門に立って言った。「どうして他の息子の家への道を知らないのかしら。」老婆羅門は他の息子の家に行った。しかし数日経つと、そこでも同じようにして追い出されて、さらに別の息子の家に行く、というようにして、ついにどの家にも入ることができなくなってしまった。そこで、灰かぶり行者として出家生活に入り、考えた。「修行者ゴータマはしかめつらせず、優しい語り口で、共に語るに気持ちよく、こころよく人を迎える、ということだ。修行者ゴータマのもとへ行き、「君ゴータマよ、この世で私には四人の息子がいます。彼らは妻たちに唆されて、私を家から追い出しました。」と告げた。

「羅門よ、それならあなたは、これらの詩句を学び覚えて、集会で大勢の人々の群れが集まり、息子たちも集まってすわったときに〔唱えるときでしょう〕。『生まれたときに私は喜び、その誕生を私は望んだ、その彼らは私を、妻たちに唆され、人か豚の如く追い払う。悪い者たちよ、生まれたときから私を、父よ、父よと呼んだではないか、羅刹たちよ、息子の姿をして、彼らは年老いた私を捨てる。老いて役立たずの馬が、食べ物を与えられないように、愚かな息子たちの父、老人は、他人の家々で食を乞う。杖のほうに私はまだ、不忠な息子たちよりは。杖は荒くれ牛を追い払い、また暴れん坊の犬を追い払う。暗闇では〔杖は人の〕前にあり、深い水では足場を作る。杖の偉大な力により、よろめいても立っていられる。』と。」

老婆羅門は世尊から詩句を学び覚えると、世尊に言われたように、婆羅門たちの集会の日に、詩を朗唱した。その当時、人々には次のような決まりがあった。「父母の資産を食べて父母を養わない者は殺されるべし」と。人々は彼の息子たちに言った。「貴殿らよ、もし今日からお父上を正しく世話しなければ、我々はあなた方を殺します。」息子たちは自分たちで担いで家に連れて行き、自分の妻の婆羅門夫人たちを呼んでこさせて、「今日からは我々の父上を正しくお世話なさい。もし怠慢になることがあれば、お前たちを追い出しますよ」と言って、上等の食事を食べさせた。

老婆羅門はある日、師を五百人の比丘たちと一緒に招きした。彼は〔家の壁を〕黄緑に塗って、あらゆる飾り物で飾り付けた家で、ブツダを始めとする比丘の群れを座につかせて、水で薄めない蜂蜜入りの粥と上等な硬い食べ物、軟らかい食べ物を給仕した。食事の途中で、婆羅門の四人の息子たちが師のそばにすわって話しかけた。「ゴータマさま、私たちは父の面倒を見ております。決して怠りません。父の様子をご覧ください。」師は、「見ています。あなた方は善いことをしました。父母を養うことは、まさに昔の賢者たちも行ったことです」とおっしゃって、「かの象が食欲を失ったため、乳香の木も白夾竹桃も育った」と、『母を養う象王前生物語 Mātuposaka-jātaka455』を詳しく語られて、次の詩句を唱えられた。「324 ダナパーラという大象は、苦い汁を垂らすとき、制御しがたい、捕らわれて一口も食べずに、大象は象の森に思いをいたす。」と。

師がご自分の前生を取り出されて語り続けられると、皆、涙を流しながら転々とし、柔和な心になって耳を傾けた。すると世尊は、彼らに心の準備が具わったことを知って、〔四つの〕真理を明らかに説かれた。法話が終わったとき、老婆羅門は息子たちと嫁たちと共に預流果を確実なものとした。

324. Dhanapālo [dhanapālako (sī. syā. kaṃ. pī.)] nāma kuñjaro, kaṭukabhedano [kaṭukappabhedano (sī. syā. pī.)] dunnivārayo;

Baddho kabaḷaṃ na bhuñjati, sumarati [susarati (ka.)] nāgavanassa kuñjaro.

324. 「財の番人」という名のクンジャラ〔象〕がいる。辛辣なる破壊者で、防護し難く、捕縛されたなら、餌を食べない。クンジャラ〔象〕は、象の林を思念する。

Dhanapālo nāma kuñjaro, Katukabhedano dunnivārayo; Baddho kabaḷaṃ na bhuñjati, Sumarati nāgavanassa kuñjaro.

守財者ダナパーラなる名の象は 激情の時御ぎよし難く繋つなげられたれば一塊の餌をも拒みひたすらに象の林をなつかしむ 訳：江原通子 No.196 (2011 年 6 月) 我が子よりは杖の方が助かる 親孝行は人間のモラルです Filial duty is a warranty of happiness.

ダナパーロ ナーマ クンジャロー カトウカベダノー ドウンニワロー
Dhanapālo nāma kuñjaro, kaṭukabhedano dunnivārayo;
「財の番人」という名の クンジャラ〔象〕がいる。 辛辣なる破壊者で、 防護し難く、
Dhanapālo=dhana/dhana(n 依属)[//]財,財物,財産+pālo/pāla:pālaka(m.sg.nom)[cf.pāleti<pā] 守護者,護者,番人 nāma/nama(adv) (Skt.id)(1)〜と名づける,〜という(2)実に,恐らくは kuñjaro/kuñjara(m.sg.nom)[//]象, kaṭukabhedano=kaṭuka/kaṭuka(a.n 有持)[//]辛(から)き,苦渋の,はげしき; 刺激性,辛らつ+bhedano/bhedana(n→m.sg.nom)[<bhedeti]破壊,分裂,変壊,断絶 dunnivārayo/dunnivāraya(a.m.sg.nom)[du-nivāraya]禁制し難き

バッドー カバラン ナ ブンジャティ スマラティ ナーガワナッサ クンジャロー
Baddho kabaḷaṃ na bhuñjati, sumarati nāgavanassa kuñjaro.
捕縛されたなら、 餌を 食べない。 思念する。 象の林を クンジャラ〔象〕は
Baddho/baddha: ①(a.m.sg.nom)[bandhati の pp] 縛されたる,束縛の,捕まった②(n)[<bandhati]革紐 kabaḷaṃ/kabaḷa(m.n.sg.acc) [Sk.kavala,BSk.kavaḍa]飯塊,飯球 na/ bhuñjati/bhuñjati: ①(v.pr.3sg)[// bhu] ①食べる,享受す,受用する②(v)[bhu] ②浄める,浄化する, sumarati/sarati: ①(v)[// sr] 流る,行く②(v.pr.3sg)[=sumarati,Sk.smṛti smṛ]記憶す,憶念す③(v)[sr]砕く,碎破す nāgavanassa=nāga/nāga(m 依属)[//]竜,象,ナーガ樹,いぬして+vanassa/vana(n.sg.dat)森林,欲林,欲 kuñjaro/kuñjara(m.sg.nom)[//]象。

(23-4) Pasenadikosavavattu コーサラ国王バセーナディの物語(2) — 師が大食のバセーナディ王を戒められた話 325 ←参照
(15-6) コーサラ国王バセーナディの物語(1) — 師がバセーナディ王の大食をやめさせた方法 204

middhī yadā hotīti imāṃ dhammadesanāṃ satthā jetavane viharanto rājānaṃ pasenadikosalaṃ ārabha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、コーサラ国王バセーナディについて語られたものである。

あるとき、王はドーナ升の米を炊かせて、それに見合ったカレーや副菜と一緒に食べていた。王はある日、朝食を食べ、食後の眠気が取れないまま師のもとへ行だったが、疲れた様子であちらこちらへとふらふらしていた。眠気に襲われても縦に寝るわけにもいかず、片側にすわった。

すると、師が王に言った。「大王よ、休息せずに来たのですか。」「その通りでございます、尊師よ。食事の後ずっと私にはひどい苦しみがあります。」すると、師は王に、「大王よ、食べ過ぎはこのような苦しみを起こすものです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「325 眠気は多く食べ過ぎたときと、転々としながら寝たあとにある、餌場でたらふく食べた大豚のごとく、怠惰な者は何度も母胎に行く。」と。

法話が終わったとき、師は王にさらに理解の助けになるように、「人に常に念慮あり、得た食べ物に節度を知るならば、彼の身体に感受があるとしても、寿命を守りつつゆっくり老いる。」とこの詩句を唱えられて、婆羅門青年ウッタラに覚えさせ、「この詩句を、王さまの食事の時間に唱えるとよいでしょう。この方法によって食を減らすことができるでしょう」と方法を教えた。

ウッタラは教えられた通りにした。王はしばらくして一ナリー升のごはんだけで満足し、軽やかな体になり、気分も良くなった。師に親愛の気持ちを生じて、七日のあいだ〈比類なき布施〉を盛大に捧げた。感謝の法話のために集まった大勢の人々も大きな感化を受けた。

325. Middhī yadā hoti mahagghaso ca, niddāyitā samparivattasāyī; Mahāvarāhova nivāpapuṭṭho, punappunāṃ gabbhamupeti mando.
325. すなわち、惰眠の者として〔世に〕有るとき、さらには、大飯食いの者として〔世に有るとき〕、眠りこけてはごろ寝をする者となる。餌で養われた大豚のように、愚か者は、繰り返し、〔母の〕胎へと近づき行く。

Middhī yadā hoti mahagghaso ca, Niddāyitā samparivattasāyī; Mahāvarāhova nivāpapuṭṭho, Punappunāṃ gabbhamupeti mando.
のろま、大食、ねむたがり ごろごろ暮らすおろか人 入胎輪廻にたたりんねをくり返す 餌ぶとりせる 豚のごと訳：
江原通子 No.197 (2011 年 7 月) 食事と解脱の関係 食べ物はこちらを明らかにするのか Nutrition of body and mind.

ミッディー ヤダー ホーティ マハッガソー チャ ニッダーイター サンパリワッタサーイー
Middhī yadā hoti mahagghaso ca, niddāyitā samparivattasāyī;
惰眠の者として すなわち、有るとき、大飯食いの者として さらには、眠りこけては ごろ寝をする者となる。
Middhī/middhin(a.m.sg.nom)[middha-in]眠れる,眠たき yadā/yadā(adv)...の時に, yadā... tadā ...の時にその時に hoti/
mahagghaso=maha/mahant(a 持)大なる,偉大の+g/+ghaso/ghasa(a.m.sg.nom)[<ghasati]食する.mahagghaso 大食者 ca/ca(conj)〜
と,また,しかし,〜も,そして, niddāyitā/niddāyitar(m.sg.nom)[cf.niddāyati]眠い人←niddāyati(v)[niddā の denom]眠る
samparivattasāyī=samparivatta/samparivatta(a 依具)[<samparivattati]転々せる,ごろごろ+sāyī/sāyin(a.m.sg.nom)[<sayati śī]臥者,
横臥せる;

マハーワラーホーワ ニワーパプットー プナッパン ガツバムペーティ マンドー
Mahāvarāhova nivāpapuṭṭho, punappunāṃ gabbhamupeti mando.
大豚のように、 餌で養われた 繰り返し、 〔母の〕胎へと近づき行く。 愚か者は、
Mahāvarāhova=mahā/+varāha/varāha(m 依属)[/猪,野猪,いのしし+iva/iva(indecl)[/ BSk.viya]如く=viya,va
nivāpapuṭṭho=nivāpa/nivāpa(m 依具)[cf.nivapati]撒餌,餌,食分-puṭṭha 餌に育てられたる+puṭṭho/putṭha : ①(a.m.sg.nom)[poseti
puṣ;pp]育成せる,養育せる②(a)[pucchati;pp]尋問せる③(a)=puṭṭha 触れたる, punappunāṃ/puna(adv.conj)[Sk.punar,punah]さら
に,再び-ppuna 再三再四,しばしば gabbhamupeti=gabbham/gabbha(m.sg.acc)[Sk.garbha] : ①胎,母胎,胎児②内室,幽室,房
+upeti/upeti(v.pr.3sg)[upa-i]ゆく,近づく,獲得する,到る mando/manda(a.m.sg.nom)[/鈍き,遅き,愚鈍の。

(23-5) Sānūsāmaṇḍeravattthu サーナ沙弥の物語 326

idaṃ pureti imaṃ dhammadesanāṃ saṭṭhā jetavane viharanto sānuṃ nāma sāmaṇeraṃ ārabha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、サーヌ沙弥について語られたものである。

サーヌ沙弥はある在家信女の一人息子だった、ということである。母親は彼を幼いときに出家させた。彼は出家したときから戒律を守り、さまざまな責務を全うした。阿闍梨、和尚、客来比丘たちへの務めをきちんと行った。月の八日目は朝早く起きて、水槽に水を入れ、法堂を拭き掃除して灯火を点し、愛らしい声で聞法の日であることを告げた。

比丘たちは彼の能力を知って、「経典を唱えてください、沙弥よ」と頼んだ。沙弥は「私の心臓が痛い」とか「体の具合が悪い」というような口答えをすることなく、法座に上がって、天上の大河を降ろすかのように〔比丘たちに向かって〕聖典を朗読し、座から降りて、「私の父母に、これを唱えた功德を捧げました」と言うのであった。

彼の両親は、功德が回向されていることを知らなかった。しかし、(沙弥の)直前の前世の母親は今生で夜叉女に生まれ変わっていた。彼女は神霊たちと一緒にやってきて法を聴き、「沙弥が回向してくれた功德に感謝します、息子よ」と言うのであった。サーヌ沙弥への尊敬から、神霊たちは〔前世の母である〕夜叉女をも敬って褒めたたえた。聞法のときや夜叉の集会などで、サーヌ沙弥の前世の母であった夜叉女に、最高の座、最高の水、最高の布施食を捧げた。大威力を持つ夜叉たちはその夜叉女を見ると、「尊敬を表すために道を譲り、座から立ち上がった〔て座を譲った〕」た。

さて、サーヌ沙弥が成長して感官が成熟すると、憂鬱に悩まされ、憂鬱を取り除くことができないまま、髪の毛や爪が伸び放題になり、内衣も外衣も汚れたまま、誰にも告げずに、鉢と衣を持って一人きりで母の家に行った。沙弥の前世の母であった夜叉女は、「神霊たちのあいだで私に恥をかかせないでほしい。行って、彼が還俗しないように邪魔をしよう」と沙弥のところへやってきて、その体に〔取り憑いて〕意識を失わせ、首を反転させて唾液を垂らさせ、地面の上に転げさせた。夜叉女は「サーヌが目覚めたら言いなさい。これが夜叉たちの言葉です。悪い行為をしてはならない、顕わにも秘密にも。もしも悪い行為を行おうとする、あるいは行いうならば、あなたから苦悩は除かれ、飛び上がって逃げようとも」と言って沙弥を解放した。

彼の母親は次の詩句を唱えた。「急ぎ走れ、あなたに幸あれ、誰を我らは説得できようか、燃え盛る家から持ち出した家財を、あなたはふたたび燃やそうと望む」と。

サーヌ沙弥が具足戒をうけてほどなく、師は彼に心の克服への焦燥を起こさせようとして、「心というものは、さまざまな煩惱のきっかけとなるもののあいだをさまよい歩くもので、それを征服しないものに至福の境地はありません。ですから、鉤棒によって凶暴になった象を鎮めるように、心の制御のために修行をするべきです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「326 この心は前世でさまよい歩いた、心が求めるもの、渴望するところを、好むままに。その心を、今日、私は完全に征服しよう、鉤棒を手にとりさかりのついた象を制御するように。」と。

法話が終わったとき、サーヌは法を聴きに集まっていたおおぜいの神霊たちとともに、法のありありとした理解を得た。サーヌ尊者は三蔵からなるブッダの言葉を習得して、偉大な説法師となり、百二十年生きて全ジャンプ州を廻ったのち、般涅槃した。

326. Idaṃ pure cittamacāri cārikāṃ, yenicchakāṃ yatthakāmaṃ yathāsukhaṃ; Tadajjahaṃ niggaheṣāmi yoniso, haṭṭhippabhinnaṃ viya āṅkusaggaho.

326. かつて、この心は、〔気ままに〕歩みさすらう者として歩んできた――求める所から、欲する所へと、安楽なるままに。わたしは、今日、それ（心）を、根源から制御するであろう――鉤をもつ捕捉者（象使い）が、狂象を〔制御する〕ように。

Idaṃ pure cittamacāri cārikāṃ, Yenicchakāṃ yatthakāmaṃ yathāsukhaṃ; Tadajjahaṃ niggaheṣāmi yoniso, Haṭṭhippabhinnaṃ viya āṅkusaggaho. 望むにまかせ 欲まかせ 楽しみ追ひし わがこころ 根から匡たださん 狂象を 鉤もて御する 御者のごと 訳：江原通子 No.198 (2011 年 8 月) 出家は自由か束縛か 自己を戒めて自由になる Mind struggles against freedom.

イダン プレー チッタマチャーリ チャーリカン イエーニツチャカン ヤッタカーマン ヤタースカン
Idaṃ pure cittamacāri cārikāṃ, yenicchakāṃ yatthakāmaṃ yathāsukhaṃ;
この かつて、心は、歩んできた 歩みさすらう者として 求める所から、欲する所へと、 安楽なるままに。
Idaṃ/ima(指代 n.sg.nom)これ pure/pure(adv.prep)[pura : ②の loc または Mg.nom 形]前に、過去に cittamacāri=cittam/citta : ①=citra(a)[Sk.citra < ci]種々の、雑種の(n)絵画、彩色②(n.sg.nom)[// < cinteti cit]心③=citra(a)[cf.Sk.caitra]月の名[3 月-4 月]
+acāri/carati(v.aor.3sg)[// car]行く、行ず、歩く cārikāṃ/cārika:cāraka,cāraṇa(a.m.n.sg.acc)旅行、遊行、徘徊(f)cārikā 遊行、
yenicchakāṃ=yena/yena[ya の m.n.instr] それをもって、そこから、...の所に-icchakāṃ すきな所に
+icchakāṃ/icchaka(a.m.sg.acc)[icchā-ka]欲せる yatthakāmaṃ=yattha/yattha(adv)[ya-ttha=yatra=Sk.]所のその場所へ、...の所へ
yattha kāmaṃ,yatth'icchakāṃ すきな所へ+kāmaṃ/kāmaṃ : ①(adv)[kāma の acc]むしろ、勝手に②(a)[kāmeti の ppr.m.sg.nom]欲しつづつ yathāsukhaṃ=yathā/yathā(adv)[ya-thā]...の如くに、...の如し-sukhaṃ 気楽に+sukhaṃ/sukha(a.n.sg.acc.adv)[//]楽、安楽、幸福;

タダッジャハン ニग्ガヘッサミ ヨーニソー ハッティッパビンナン ウヤー アンクサッガホー
Tadajjahaṃ niggaheṣāmi yoniso, haṭṭhippabhinnaṃ viya āṅkusaggaho.
今日、わたしは、 それ（心）を制御するであろう 根源から 狂象を 〔制御する〕ように。 鉤をもつ捕捉者が、
Tadajjahaṃ=tad/ta(人指示代 n.sg.acc)彼、その、彼女+ajja/ajja(adv)[Sk.adya]今日、今+aham/aham(人代 sg.nom)私
niggaheṣāmi/niggaṇhāti(v.fut.1sg)[Sk.nigrhñāti.ni-grah]抑止す、折伏す、叱責す yoniso/yoniso(adv)[yoni の abl]根源より、根本的に、
如理に、 haṭṭhippabhinnaṃ=hatthi/hatthin(m 持)[Sk.hastin]手ある、象、牡象-ppabhinna 狂象、さかりのついた象+p/
+pabhinnaṃ/pabhinna(a.m.sg.acc)[pabhindati の pp]破壊せる、開花せる、さかりのついた、発展せる←pabhindati(v)[pa-bhid] 破壊する、
破る viya/viya : ①(adv)[BSk. //, v'iva(va iva) > viya]...の如く[iva,va とする] : ②[疑問的に使用]na viya maññe 私は...でないと
思う āṅkusaggaho=āṅkusa/āṅkusa(m 依属)[Sk.āṅkuśa]鉤-ggaha 象師+g/+gaho/gaha : ①(n)[Sk.grha]cf.geha 家、家居
②(m.sg.nom)[Sk.graha < gaṇhāti]捕捉者、夜叉、鰐魚。

(23-6) Pāveyyakahatthivatthu 象のバッデーラカのお話 327

appamādaratāti imam dhammadesanāṃ satthā jetavane viharanto kosalarāṇṇo pāveyyakaṃ nāma hatthiṃ ārabha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、コーサラ国王のバッデーラカという名の象について語られたものである。

その象はまだ若いときに大力を持つようになったが、後に老齢の勢いに打ち負かされ、ある大池に降りたところ、泥にはまって上がることができなくなった。大勢の人々がそれを見て、「あのような象でも、こんなに力が弱くなってしまった」と話を始めた。王がその出来事を聞いて、象の調教師に命じた。「行って、その象を泥から引き上げなさい。」調教師は行って、その場所で戦の先陣の様子を見せ、戦の陣太鼓を打たせた。自尊心の強い象は勢いよく立ち上がり、乾いた地面に立った。

比丘たちはこの次第を見て、師に報告した。師は、「比丘たちよ、その象は見える泥沼から自分を引き上げました。しかしあなた方は、〔見えない〕煩悩の深みにはまっています。それゆえ、あらゆる努力をして、あなた方もそこから自分を引き上げなさい」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「327 油断しないでおれ、自らの心を守れ、困難から自らを引き上げよ、泥にはまった象のように。」と。

法話が終わったとき、その比丘たちは阿羅漢果に確実に立った。

327. Appamādaratā hotha, sacittamanurakkhatha; Duggā uddharathattānaṃ, paṅke sannova [sattova (sī. pī.)] kuṇjaro.

327. 「あなたたちは、気づきを」怠らないこと（不放逸）に喜びある者たちと成れ。自らの心を守れ。難所から自己を引き抜け――汚泥にはまったクンジャラ〔象〕が、〔自らを引き抜く〕ように。

Appamādaratā hotha, Sacittamanurakkhatha; Duggā uddharathattānaṃ, Panke sannova kuṇjaro.

不放逸をば尊びて おのが心を守れかし 沼にはまりし象クンジャラが 泥より身をば抜く如く 自己を引抜け難所から
訳：江原通子 No.199 (2011 年 9 月) 生きるという泥沼 自力で這い上がるべき生きるという泥沼 Diligence rescues your life

アッパマダーター

ホータ

サチッタマヌラッカタ

Appamādaratā

hotha,

sacittamanurakkhatha;

怠らないこと（不放逸）に喜びある者たちと

成れ。

自らの心を守れ。

Appamādaratā=appamāda/appamāda(m)[a-pamāda]不放逸+ratā/rata(a.m.pl.nom)[ramati ram の pp]楽しむ、愛好せる

hotha/bhavati(v.imper.2pl)[bhū] ある、存在する, sacittamanurakkhatha=sacittam/sacitta : ①(n.sg.acc)[sva-citta]自心②(a)[saha-citta]

同心の+anurakkhatha/anurakkhati(v)[anu-rakkhati]守る、守護する、保護する;

ドゥッガー

ウッダラタッターナン

パンケー

サンノーワ

クンジャロー

Duggā

uddharath'attānaṃ,

paṅke

sannova

kuṇjaro.

難所から

引き抜け 自己を

汚泥に

はまった〔自らを引き抜く〕ように。

クンジャラ〔象〕が、

Duggā/dugga(m.n.a.m.sg.abl)[du-ga]難路、嶮路、行き難き uddharathattānaṃ=uddharatha/uddharati(v.imper.2pl)[ud-dharati < dhr]揚げる、上げる、取り除く、引き抜+attānaṃ/attan(m.sg.acc)[Sk.ātman]我、自己、我体, paṅke/paṅka(m.sg.loc)[/]泥、汚泥、泥土、泥地。 - dharī 泥を持つ女。 sannova=sanno/sanna : ①(a.m.sg.nom)[sīdati sad の pp]沈んだ、没せる②(a)[sandati syand の pp]流れたる +iva/iva(indecl)[/ BSk.viya]如く=viya,va kuṇjaro/kuṇjara(m.sg.nom)[/]象。

sace labhethāti imaṃ dhammadesanaṃ satthā pālīyeyyakam nissāya rakkhita vanasaṇḍe viharanto sambahule bhikkhū ārabha kathesi. この法話は、師がパーリレツヤカ村の近くのラッキタ叢林に滞在しておられたときに、ある比丘たちについて語られたものである。

如来が象王の世話を受けて〔雨安居〕を過ごされていることは、全ジャンプ州に知れわたった。サーヴァッティー市からアナタピンディカ在家信者、ヴィサーカー在家信女などの有力な家々が、アーナンダ長老に伝言を送った。「尊師よ、私たちを師に会わせてください」と。

地方に住んでいる五百人の比丘たちも、雨安居が終わるとアーナンダ長老のところへやってきて、「ご同朋アーナンダよ、世尊に直接お会いして、法の話をお聴くのは久しぶりです。ご同朋アーナンダよ、よろしく我々が世尊に直接お会いして法話を聴けるように取り計らってください」と懇願した。アーナンダ長老はこれらの比丘たちを連れて、世尊が滞在されている場所へ行ったが、「三カ月のあいだ一人で過ごしておられた如来のもとへ、これだけの比丘たちと一緒に近づくのは適当ではない」と考えて、自分一人で師に近づいた。

象のパーリレツヤカは長老を見て、丸太を掴んで追い払おうとした。師はご覧になって、「やめなさい、パーリレツヤカよ。追い払ってはいけません。彼はブッダに奉仕する人です」とおっしゃった。象は言われたとおりに丸太を捨てて、鉢と衣を受け取ろうと申し出るしぐさをした。長老は鉢と衣を地面に置いた。長老は師を礼拝して、片側にすわった。

師は、「一人きりで来たのですか」とお訊ねになり、五百人の比丘たちと一緒に来たことをお聞きになると、「他の比丘たちはどこにいますか」とおっしゃった。長老が、「あなたさまのお気持ちがわからないので、外に待たせて、私だけが参りました」と答えると、「彼らと呼びなさい」とおっしゃった。

アーナンダ長老はそのとおりにした。師は比丘たちと挨拶の言葉をかわしたのち、比丘たちが、「尊師よ、世尊はブッダの妙なるもので、クシャトリヤ族の妙なるお方であらせられるのに、三カ月もたった一人で起居されて、苦勞され、さまざまな奉仕をする者もなく、口を漱ぐ水などを持ってくる者もいなかったのをございましょう」と言うとき、

「比丘たちよ、パーリレツヤカ象が、私に対してすべての務めを果たしてくれました。このような友を得た者にとっ一人で暮らすことは快適です。〔友を〕得られない者にとっても、一人で行動することはより良いことです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「328 もしも、聡明で共に行動し正しい生活をする、深謀ある友人を、得るならば、あらゆる危難を乗り越えて、心満足し、念慮をそなえて、かれと共に歩め。」「329 しかし、聡明で共に行動し正しい生活をする、深謀ある友人を、得られないならば、王が、征服した領土を捨てて行くように、森林の中の象のように、ひとり歩め。」「330 愚かな者を友人とするな、それよりは、ひとりで行くほうがよい。ひとり歩め。罪深いことをするなかれ。森林の中の象のように、求めるものは少なくあれ。」と。

法話が終わったとき、五百人の比丘たちは阿羅漢果に確実に立った。

328. Sace labhetha nipakam sahāyam, saddhim caram sādhuviḥāridhīraṃ; Abhibhuyya sabbāni parissayāni, careyya tenattamano satimā.

328. それで、もし、賢明なる道友を得るなら、共に歩む善き住者たる慧者を〔得るなら〕、一切の危難を征服して、わが意を得た気づきの者となり、彼とともに、歩むがよい。

328. Sace labhetha nipakam sahāyam, Saddhimcaram sādhuviḥāri dhīraṃ; Abhibhuyya sabbāni parissayāni, Careyya tenattamano satimā.

329. No ce labhetha nipakam sahāyam, Saddhimcaram sādhuviḥāri dhīraṃ; Rājāva rattham vijitam pahāya. Eko care mātangaraññeva nāgo

300. Ekassa caritam seyyo, Natthi bāle sahāyatā; Eko care na ca pāpāni kayirā, Appossukko mātangaraññeva nāgo.

328. もし善賢の友ありて 共にあらんと願いなば 困苦に克ちて念サティ深く 心悦び俱とも行け

329. 心勝すぐれし伴ともなくば その領國に棄つる王のごと 独り 森行く象のごと 君また一人行けよかし

300. おろかなものを伴ともとなすな おしる独りをよしとなす 独り 悪をなさずして 小欲 象の如くあれ 訳：江原通子 No.200 (2011 年 10 月) 苦しみをつかさどる執着 善友がなければ独りで住む Attachment vs freedom.

サチェー	ラベータ	ニパカン	サハーヤン	サッディン	チャラン	サードウヴィハーリディーラン
Sace	labhetha	nipakam	sahāyam,	saddhim	caram	sādhuviḥāridhīraṃ;
それでもし、	得るなら、	賢明なる	道友を	共に	歩む	善き住者たる慧者を〔得るなら〕、
Sace/sace(conj)もし.cf.ce labhetha/labhati(v.opt.反照態 3sg)[labh]得る nipakam/nipaka(a.m.sg.acc)[cf.BSk.nipaka]賢明の、慎重なる、智者 sahāyam/sahāya(m.sg.acc)[/ < saha-i]朋友、仲間、僚友, saddhim/saddhi- : saddhim(adv.prep)共に<一緒に caram/caranta(a.m.sg.nom)[carati の ppr]行者(行じつつ・行じながら) sādhuviḥāridhīraṃ=sādhu/sādhu(a.adv.interj 持)[/ < sādhi]善き、善良の、善人、善く; 善い哉、善哉、何卒、どうぞ、幸甚なり+vihāri/vihārin(a 持)[vihāra-in]住者、住ある +dhīraṃ/dhīra(a.msg.acc)堅固な、賢き、賢者、慧者、英賢;						

アビブツヤ	サッバーニ	パリッサーニ	チャレツヤ	テーナツタマノー	サティーマー
Abhibhuyya	sabbāni	parissayāni,	careyya	tenattamano	satimā.
征服して、	一切の	危難を	歩むがよい。	彼とともに、わが意を得た	気づきの者となり、
Abhibhuyya/abhibhuyati : abhibhuyati(v)[abhibhavati の pass.] 征服される←abhibhavati(v)[abhi-bhavati]打ち勝つ、征服す sabbāni/sabba(a.代的 m.n.pl.acc)[Sk.sarva]一切の、すべて、一切のもの parissayāni/parissaya(m.n.pl.acc)[BSk.parisraya,parisrava]危難、危険、險難, careyya/carati(v.opt.3sg)[/ car]行く、行ず、歩く tenattamano=tena/ta(人指示代 m.sg.inst)彼、その、彼女 +attamano/attamana(a.m.sg.nom)[atta ①-mana]心にかなえる、適意の、悦意の←atta : ①(a)得た、取れる②=attan(m)我、自己、我体 satimā/satimant(a.m.sg.nom)[sati-mant]具念の、有念者。					

329. No ce labhetha nipakaṃ saḥāyaṃ, saddhiṃ caraṃ sādhuviḥāridhīraṃ; Rājāva raṭṭhaṃ vijitaṃ pahāya, eko care mātaṅgarañña nāgo.

329. もし、賢明なる道友を得ないなら、共に歩む善き住者たる慧者を〔得ないなら〕、征圧した国土を捨棄して〔顧みない〕王のように、林のなかのマータンガ象のように、独り、歩むがよい。

ノー	チェー	ラベータ	ニパカン	サハーヤン	サッディン	チャラン	サードウヴィハーリディーラン
No	ce	labhetha	nipakaṃ	saḥāyaṃ,	saddhiṃ	caraṃ	sādhuviḥāridhīraṃ;
	もし、	得ないなら、	賢明なる	道友を	共に	歩む	善き住者たる慧者を、

No/no : ①(adv)=nu : ②(adv)[強調の語]確かに③(adv)=na : ④(pron)[Sk.naḥ]ahaṃ の pl.nom.acc.gen.dat. **ce/ce**(conj)もし、若し **labhetha/labhati**(v.opt.反照態 3sg)[labh]得る **nipakaṃ/nipaka**(a.m.sg.acc)[cf.BSk.nipaka]賢明の、慎重なる、智者 **saḥāyaṃ/sahāya**(m.sg.acc)[// <saha-i]朋友、仲間、僚友、**saddhiṃ/saddhi-** : saddhiṃ(adv.prep)共に<一緒に **caraṃ/caranta**(a.m.sg.nom)[carati の ppr]行者（行じつつ・行じながら） **sādhuviḥāridhīraṃ=sādhu/sādhu**(a.adv.interj 持)[// <sādh]善き、善良の、善人、善く；善い哉、善哉、何卒、どうぞ、幸甚なり+**viḥāri/vihārin**(a 持)[viḥāra-in]住者、住ある +**dhīraṃ/dhīra**(a.msg.acc)堅固な、賢き、賢者、慧者、英賢；

ラージャーワ	ラッタン	ヴィジタン	パハーヤ	エーコーチャレー	マータンガラニエーワ	ナーゴー
Rājāva	raṭṭhaṃ	vijitaṃ	pahāya,	eko care	mātaṅgarañña	nāgo.
王のように、	国土を	征圧した	捨棄して	独り、歩むがよい。	林のなかのマータンガ象のように、	

Rājāva=rājā/rājan:rājā(m.sg.nom)王,国王+**iva/iva**(indecl)[// BSk.viya]如く=viya,va **raṭṭhaṃ/raṭṭha**(n.sg.acc)[Sk.rāṣṭra]国,王国 **vijitaṃ/vijita**(a.n.sg.acc)[// vijayati の pp]征服せる、勝利の；領土,王国 **pahāya/pahāya**(v)[pajahati の ger]捨てて←**pajahati**(v) [pa+hā+a](hā が二重になり、前の h が j に変わる)諦める；放棄する；見捨てる、**eko/eka**(a.num.m.nom)[//]一、一つ、或る **care/carati**(v.opt.3sg)[// car]行く、行ず、歩く **mātaṅgarañña=mātaṅga/mātaṅga**(m 依属)[//]象；下層民；植物名-ārañña 林中の象 +**arañña/arañña**(n.sg.loc)[araṇa]阿蘭若、阿練若、林野、閑林、空閑処、人里はなれた所+**iva/iva**(indecl)[// BSk.viya]如く=viya,va **nāgo/nāga**(m.sg.nom)[//]竜、象、ナーガ樹、いぬして。

330. Ekassa caritaṃ seyyo, natthi bāle saḥāyatā; Eko care na ca pāpāni kayirā, appossukko mātaṅgarañña nāgo.

330. 独りある者の歩みのほうが、より勝っている。愚者のうちに、道友たること（真の友情）は存在しない。しかして、諸々の悪しきことを為さず、〔俗事に〕思い入れ少なく、林のなかのマータンガ象のように、独り、歩むがよい。

エーカッサ	チャリタン	セッヨー	ナッティ	バーレー	サハーヤター
Ekassa	caritaṃ	seyyo,	natthi	bāle	saḥāyatā;

独りある者の 歩みのほうが、より勝っている。 存在しない。愚者のうちに、道友たること（真の友情）は **Ekassa/eka**(a.num.m.gen)[//]一、一つ、或る **caritaṃ/carita**(a.n.m.sg.nom)[// carati の pp]所行、行ぜる、行、行為、行者、性行者、性格者 **seyyo/seyya**(a.n.sg.nom)よりよき、よりすぐれた、**natthi=na/+atthi/atthi** : ①(v)[Sk.asti<as]ある、存在する②[Sk.asti]有、存在 **bāle/bāla** : ①(a)愚なる、愚痴の、無知の；若き、新しき②=vāla 頭髮 **saḥāyatā/sahāyatā**(f.sg.nom), **sahāyatta**(n)[<sahāya]親交、友情、友たること

エーコーチャレー	ナ	チャパーパーニ	カイラー	アッポッスッコー	マータンガラニエーワ	ナーゴー
Eko care	naca	pāpāni	kayirā,	appossukko	mātaṅgarañña	nāgo.
独り、歩むがよい。	しかして、	諸々の悪しきことを為さず、	思い入れ少なく、	林のなかのマータンガ	象のように、	

Eko/eka(a.num.m.nom)[//]一、一つ、或 **care/carati**(v.opt.3sg)[// car]行く、行ず、歩く **na/ ca/ pāpāni/pāpa**(a.n.pl.acc)悪き、悪、悪人 **kayirā/karoti**(v.opt.3sg)[kr]なす、行う、作る、**appossukko/appossukka**(a.m.sg.nom)[appa-ussuka,Sk.alpotsuka]無関心の、無為の、不活動の **mātaṅgarañña=mātaṅga/mātaṅga**(m 依属)[//]象；下層民；植物名-ārañña 林中の象+**arañña/arañña**(n.sg.loc)[araṇa]阿蘭若、阿練若、林野、閑林、空閑処、人里はなれた所+**iva/ nāgo/nāga**(m.sg.nom)[//]竜、象、ナーガ樹、いぬして。

(23-8) Māravatthu 魔王マラーの物語(2) — 師に王になるよう唆す 331-333

atthamhīti imaṃ dhammadesanaṃ satthā himavantapadesa araṇṇakūṭikāyaṃ viharanto māraṃ ārabha kathesi.

この法話は、師がヒマラヤ山のふもとで森林中の庵に住んでおられたときに、魔王マラーについて語られたものである。

その当時、王たちは人民を苦しめて王権をふるっていた。すると、世尊は無法な王たちの支配のもとで刑罰に苦しめられている人々を見て、憐愍から次々にお考えになった。「殺すことなく、殺させることなく、〔敵に〕勝利することなく、勝利させることなく、悲しむことなく、悲しませることなく、法によって王の政治を行うことはできないのか」と。

魔王マラーが世尊の深い思念を知って、「尊師よ、世尊は実に四つの神通力をよく具えておられ、世尊が望まれるだけで、山の王ヒマラヤ山が『黄金であれ』と念じられると、それは黄金になります。私もその財宝によって財宝のできることをしましょう。そして、あなたさまは法によって王の政治を行いなさいませ。」

次のように言われている。「黄金の山、純金の山一つだけでも、二つあるいは三つでも一人には足りない、そのように(知って)賢者は平静に振る舞うべし。」「苦しみが何を原因としているかを見た者、その人がどうして諸々の欲望に傾くことがあるのか。煩惱をこの世の執着と知り、人は自制を修練すべし。」と。これらの詩句によってマラーに警告し、「悪しき者よ、他にあなたに戒めること、他に私があなたと共に論ずべきことはありません。私はこのように戒めます」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「331 必要が生じたときに友情あることは幸いなり、互いに分かち合い満足することは幸いなり、命の終わるとき福德があることは幸いなり、あらゆる苦しみを捨てることは幸いなり。」「332 この世で母に仕えることは幸いなり、また、父に仕えることは幸いなり、この世で修行者に仕えることは幸いなり、また、梵行者に仕えることは幸いなり。」「333 老いるまで戒を守ることは幸いなり、信心が確かであることは幸いなり、(世間・出世間の智慧を獲得することは幸いなり、罪を犯さないことは幸いなり。)」と。

法話が終わったとき、多くの神々に法のありありとした理解があった。

象の章の注解 終わり 第二十三章

331. Atthamhi jātamhi sukhā sahāyā, tuṭṭhī sukhā yā itarītarena; Puññaṃ sukhaṃ jīvitasāṅkhayamhi, sabbassa dukkhassa sukhaṃ pahānaṃ.

331.義(事態)が生じたとき、道友たちがいることは、安楽である。すなわち、いかなるものによっても〔足ることを知り〕、満足〔の思い〕あることは、安楽である。生命の消滅あるとき、〔善き〕功德あることは、安楽である。一切の苦痛を捨棄することは、安楽である。

331. Atthamhi jātamhi sukhā sahāyā, Tutthī sukhā yā itarītarena; Puññaṃ sukhaṃ jīvitasāṅkhayamhi, Sabbassa dukkhassa sukhaṃ pahānaṃ.

332. Sukhā mattheyyatā loke, Atho petteyyatā sukhā; Sukhā sāmāññatā loke, Atho brahmaññatā sukhā.

333. Sukhaṃ yāva jarāsīlaṃ, Sukhā saddhā patitthitā; Sukho paññāya patilābho, Pāpānaṃ akaraṇaṃ sukhaṃ.

331. 事ある時 友あるは幸さち 大小の事 満足するは幸 善なし置けば 命終みようじゅうに幸 諸苦の捨断は 又幸なり 人の世に

332. 母に仕つかうは 幸しあわせぞ 父に仕うも 幸せぞ この世にて 沙門たること 幸せぞ 婆羅門たるも 幸せなり

333. 老いて尚 戒受持するは 幸せぞ 信の確立 幸せぞ 智慧の獲得 幸せぞ 諸悪なさぬは 幸せなり 訳：江原通子

No.201 (2011 年 11 月) いったい幸福とはなんなのでしょうか？ 簡単に幸福を実現できる方法 Concept and reality of happiness

アッタナンヒ ジャータンヒ スカー サハーヤー トウツティー スカー ヤー イタリータレーナ

Atthamhi jātamhi sukhā sahāyā, tuṭṭhī sukhā yā itarītarena;

義が生じたとき、安楽である。道友たちは、満足あることは、安楽である。いかなるものによっても

Atthamhi/attha : ①(m.n.sg 処絶)[Sk.artha]義,利益,道理,意味,必要,裁判②(n)[Sk.asta] attham gacchati[日が西に]没す,帰る

jātamhi/jāta(a.n.sg 処絶) // janati の pp]生ぜる,発生の,生起の←janati(v)[// jan]生ずる,産む sukhā/sukha(a.n→f.sg.nom)[//]楽,安楽,幸福 sahāyā/sahāya(m→f.sg.nom)[// <saha-i]朋友,仲間,僚友, tuṭṭhī/tutthi(f.sg.nom)[cf.tuttha]満足,知足 sukhā/ yā/ya(関代.f.sg.nom)[Sk.yah]~である人,~であるもの itarītarena/itaritara(n.sg.inst)彼此的,いかなる,あらゆる←itara(a)[//]他の,次の

プンニャン スukkan ジーヴィタサンカヤンヒ サツバツサ ドウツカツサ スカー パハーナン

Puññaṃ sukhaṃ jīvitasāṅkhayamhi, sabbassa dukkhassa sukhaṃ pahānaṃ.

功德あることは、安楽である。生命の消滅あるとき、一切の苦痛を安楽である。捨棄することは、

Puññaṃ/puñña(n.sg.nom)福,善,福德,功德 sukhā/sukha(a.n.sg.nom)[//]楽,安楽,幸福 jīvitasāṅkhayamhi=jīvita/jīvita(n 依属)[//

jīvati: pp]生命,命,壽命,活命+saṅkhayamhi/saṅkhaya(m.sg.loc)[saṅ-khaya,Sk.saṃkṣaya]尽滅,消滅,滅亡←khaya(m)尽,尽滅,滅尽←khaya(m)尽,尽滅,滅尽 sabbassa/sabba(a.代的 m.n.sg.gen)[Sk.sarva]一切の,すべて,一切のもの dukkhassa/dukkha(a.n.sg.gen)苦,苦痛,苦惱 sukhā/ pahānaṃ/pahāna(n.sg.nom)[cf.pajahati<hā]捨,断,捨断,捨離。

332. Sukhā mattheyyatā loke, atho pettheyyatā sukhā; Sukhā sāmāññatā loke, atho brahmaññatā sukhā.

332.世において、母を敬うことは、安楽である。しかして、父を敬うことは、安楽である。世において、沙門の資質あることは、安楽である。しかして、梵（婆羅門）の資質あることは、安楽である。

スカー	マテッヤター	ローケー	アトー	ペッテッヤター	スカー
Sukhā	mattheyyatā	loke,	atho	pettheyyatā	sukhā;
安楽である。母を敬うことは、世において、しかして、父を敬うことは、安楽である。					
Sukhā/ sukha(a.n→f.sg.nom)[//] 楽, 安楽, 幸福 mattheyyatā/ mattheyyatā:,mettheyyatā(f.sg.nom)[mattheyya-tā]母への孝行,敬母 ←mattheyya:,mettheyya(a)[< mātar]母を敬う,母への孝行の loke/ loka(m.sg.loc)世,世間,世界, atho/ atho, atha(ind)時に,また pettheyyatā/ pettheyyatā(f)[pettheyya-tā]敬父,孝行 sukhā/ ;					

スカー	サーマンニャター	ローケー	アトー	ブラフマンニャター	スッカー
Sukhā	sāmaññatā	loke,	atho	brahmaññatā	sukhā.
安楽である。沙門の資質あることは、世において、しかして、梵（婆羅門）の資質あることは、安楽である。					
Sukhā/ sāmāññatā/ sāmāññatā : =sāmāñña : ① ②←sāmāñña : ①(a.f.sg.nom)[sāmaṇa-ya]沙門性,沙門位,沙門法②(n)[samāna-ya]平等,等一,統一 loke/ , atho/ brahmaññatā/ brahmaññatā(f.sg.nom)[brahmañña-tā] = brahmañña←brāhmañña:,brahmañña(m)[brāhmaṇa-ya]婆羅門法,婆羅門位,婆羅門たること sukhā/ .					

333. Sukhaṃ yāva jarā sīlaṃ, sukhā saddhā paṭiṭṭhitā; Sukho paññāya paṭilābho, pāpānaṃ akaraṇaṃ sukhaṃ. Nāgavaggo tevīsatiso niṭṭhito.

333.すなわち、老いてなお、戒あることは、安楽である。確立した信あることは、安楽である。智慧を獲得することは、安楽である。諸々の悪を為さないことは、安楽である。

スカン	ヤーワ	ジャラー	スィーラン	スカー	サッダー	パティッティター
Sukhaṃ	yāva	jarā	sīlaṃ,	sukhā	saddhā	paṭiṭṭhitā;
安楽である。すなわち、老いてなお、戒あることは、安楽である。信あることは、確立した						
Sukhaṃ/ sukha(a.n.sg.nom)[//] 楽, 安楽, 幸福 yāva/ yāva(adv.prep)まで,限り,...の間は jarā/ jarā(f.s.nom)jaras(n)[jīr]老,老衰 sīlaṃ/ sīla(n.s.nom)戒,戒行,習慣,道德, sukhā/ sukha(a.n→f.sg.nom)[//] 楽, 安楽, 幸福 saddhā/ saddhā(f.sg.nom)[< saddahati,Sk.śraddhā]信,信仰,信心,信用 paṭiṭṭhitā/ paṭiṭṭhita(a.n)[paṭiṭṭhahati のpp]定立せる,住立せる,止住せる;止住,安住処 ←paṭiṭṭhahati:paṭiṭṭhāti(v)[paṭi-sthā]住立す,確立す,止住す;						

スコー	パンニャーヤ	パティラーボー	パーパーナン	アカラナン	スカン
Sukho	paññāya	paṭilābho,	pāpānaṃ	akaraṇaṃ	sukhaṃ.
安楽である。智慧を 獲得することは、諸々の悪を 為さないことは、安楽である。					
Sukho/ sukha(a.n→m.sg.nom)[//] 楽, 安楽, 幸福 paññāya/ paññā(f)[Sk.prajñā.cf.pajānāti]般若,慧,智慧-paṭilābha 慧の獲得 paṭilābho/ paṭilābha(m.sg.nom)[cf.paṭi-labh]獲得,得達, pāpānaṃ/ pāpa(a.n.pl.gen)悪き,悪,悪人 akaraṇaṃ/ akaraṇa(n.sg.nom)[a- karaṇa]不作,なさざること sukhaṃ/ .					

Nāgavaggo tevīsatiso niṭṭhito.象の章が第二十三となり、〔以上で〕終了した。